

たけの子のモットーはAKB(あぶない・きたない・ばかばかしい)。子どもたちが自分で選んで実行できる環境をつくりたい。

―― 辺見妙子さんに聞く

聞き手・まとも 林崎知美 (女子の暮らしの研究所)

「女子の暮らしの研究所」(女子くら)は、3.11の震災と原発事故の後、一人ひとりが自分の暮らしを見つめ直し、これからどう生きるのかを考え、行動する社会をつくるために設立。福島県伝統工芸に「かわいい」をプラスした商品開発、「ラボララジオ」での情報発信、福島を知る旅「Retrip」、ワークショップなどを企画・開催しています。http://www.girls-life-labo.com/

この連載は、福島でいま注目される人や活動などを研究員が取材し、伝えていきます。

遊びのヒントを見つけて欲しいなと思っ
ています。そのあとは、自由。夏は
だいたい虫とりですね。時々季節のイ
ベントがあります。基本的にお昼はお
弁当ですが、月に2回は子どもたちと
一緒に給食を作ります。
―― 子どもたちが元気いっぱい、保
育園で遊んでいるというよりは「暮ら
している」ように見えます。この青空
保育を始めたきっかけは？

震災・原発事故が起きてから、福島で
子育てをすることに悩んだ親は多くい
ます。まだ母親でない私も、もし子ど
もがいたらどうするだろうと何度も考
えました。福島で子育てをする方々に
お話を伺う中で、震災後に福島市から
山形県米沢市に移ったユニークな保育
園があると知り、米沢へ向かいました。
―― 「青空保育たけの子」(以下、た
けの子)はどのような保育園ですか？
辺見 子どもたちの自然体験活動を行

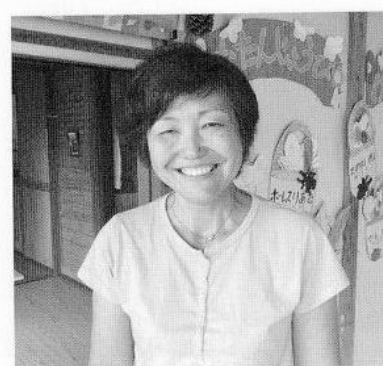
っています。2009年に福島市の私
の自宅で始めて、震災後に米沢に移り
ました。現在は福島市から5人の園児
が園のバスで一時間かけて通っていま
す。あとは米沢から2人、一時保育に
定期的に通っている園児が1人います。
たけの子の1日は朝の会から始まり
ます。朝の会ではわらべ歌をうたいま
す。童謡は大人が子どものために作っ
たものですが、わらべ歌は自然のあそ
びから発生したものなんです。それ
から絵本を読みます。1日の始まりに

2002年に福島県保育協議会
が自主上映した映画「こどもの時間」
を観て衝撃を受けたんです。子ども達
が喧嘩(けんか)をしたり野原の中で走り回った
り。自然なかたちで子どもたちが過
している。それを見て、こういう保育
がしたい！と。当時は別の仕事をして
いて、保育者ではなかったんですが。
そして2006年に神奈川県つくし
んぼという幼児グループを訪れる機会
がありました。そこでは園舎のない保

育をしていて、「これだったらでき
る！」という間違った認識をしたん
ですね(笑)。それから通信教育で保育
士の勉強を始めて国家試験に合格し、
2008年の10月から週に1回のプレ
保育をスタートしました。

―― 映画に出会うまでは保育との関
わりはなかったんですか？

辺見 まさか自分が保育士になるとは
思っていませんでしたが、地域の幼児
サークルを手伝っていました。中学高
校と演劇をやっていたので、人形劇や



辺見妙子(へんみ・たえこ)
福島市出身。NPO 法人青空保育たけの子代
表。福島コダイ合唱団でも活動している。

紙芝居は得意なんです。幼児サークル
を手伝っている時、お母さんたちが受
け身だったのが印象に残っています。
私たちが劇をやっているのを子どもに
見せて、それだけ。なんか違うなって。
その後、映画に出会い、子どもたちが
自発的に遊ぶことができるようになる
といいなと思ったんです。そんな話を
友達にすると、誰も止めない(笑)。
「いーね！」とか「そうだったらうち
の子いれます！」とか。私が所属して
いる合唱団の恩師も「いつも学びなさ
い」と背中を押してくれました。夫も
応援してくれました。
―― たけの子の創設当初のお話を聞
かせてください。
辺見 カリキュラムのない保育、五感
を磨ける保育がしたいよね、と最初は
プレ保育(週に1日だけの体験保育)か
ら始めて、15人程の子どもが通ってい
たので、これは順風を始められると思
ったんですが、いざ開園したら入園児

はたった2人。とにかく始めようと、
福島市の自宅を拠点に、2人の子ども
たちとのスタートでした。当初は自然
の中に子どもを連れていったら喜んで
たくさん遊ぶだろう、と思っていたん
です。でも最初に近所の芝生に子ども
たちを連れていったら「早く遊ぶとこ
ろに行こうよ」と言われて、子どもは
遊び方がわからなければ遊ばないん
だ。外遊びを続けて、子どもたち
の遊びを創り出す力、想像力が養わ
れてきたなあと感じています。
―― 震災・原発事故があった時、たけ
の子はどういった状況でしたか？
辺見 2011年3月は園児が5人い
て、4月から数人増える予定だったの
で認可外保育所として申請しようと思
っていた矢先でした。園児は3月中旬に
全員避難しました。4月に「子どもた
ちを放射能から守る福島ネットワー
ク」の立ち上げ準備会に参加して、そ
こで初めて、幼い子を持つほとんどの

人が避難をしていない事実を知ったんです。そして、その時すでに「放射能」という言葉が言いづらいものになっていくことに驚きました。

当時私たちは放射能のことを何も知らず、放射性ヨウ素は半減期が短いから、秋にはたけの子を再開できると思っていたんです。セシウムがあると初めて知り、どのくらいまで下がったか、たけの子を再開するか、スタッフと話し合いを重ねました。政府は年間被ばく線量の安全基準を20ミリシーベルトとしていましたが、私たちは2ミリシーベルトに抑えたいと考えて、それを毎時で換算すると、0・2マイクロシーベルト以下にならないと外で遊ばせることができない。勉強会や会合への参加を重ねるうちに、福島ではたけの子を続けられないと考えました。園庭を除染したとしても、山も土手も簡単に除染できませんから。

5月になって、北海道に避難してい

た園児と母親が福島に帰ってきました。母子避難の限界でした。「福島に帰ってきたらたけの子に入れたい」と

言ってくれたので、急きよ5月から再開することにしました。子どもをどこで遊ばせようかなと、線量計を持っていろんなところを歩きました。唯一許せると思ったのが、福島市西部にある四季の里という公園のジャングルジムの上。周辺の芝生は毎時1マイクロシーベルトほどありましたが、ジャングルジムの上は線量が低かったんです。子どもを遊ばせていたら、他の保育園がバスできて、芝生の上で大玉ころがしが始まったんです。それでは芝生の上の放射性物質が舞い上がり、子どもが吸い込んでしまう。余計な御世話かもしれないと思いつつも、保育士に声をかけました。「放射線管理区域ってご存知ですか。毎時約0・6マイクロシーベルトのところ子どもを遊ばせるのはよくありませんよ。ここは1マ

イクロシーベルトくらいあります」。

すると「保護者の同意書をとってま

から」と。私は何も言えなくなりまし

た。保護者は安全に保育してくれてい

ると思つて保育園に預けているはずで

す。それは親の信頼を裏切ることで

はないかと思いました。私はなるべく線

量の低いところを見つけて、子どもを

遊ばせることに力を注ぎました。

——震災当時たけの子に通っていた

子どもたちの様子はいかがでしたか。

辺見 新聞社が取材に来たことがあり

ました。記者が子どもに「今一番何が

したい？」と質問すると「ブランコ

に乗りたい」と。「ブランコに乗れな

くてどう思う？」と聞かれると子ども

が黙っちゃって。消え入りそうな声で

「寂しい」と。子どもがブランコにも

乗れない環境は本当におかしい。その

子はどんなに暑くても、長袖にマスク

姿でした。県外に遊びに行つても。私

たちが「脱いでもいいよ。取つていい

よ」と言うまで外さないと。

——たけの子が山形県の米沢市に引

つ越した経緯を教えてください。

辺見 米沢に自主避難した人たちが途

中入園できなくて困っているという話

を聞いて、それならうちが行こうと。

2011年の10月から。当時は全く地

縁がなかったのですが、山形の復興支

援ボランティアセンターの人たちと繋

がり、たくさんの人にサポートして

いただきました。現在のところには



昨日は芋掘り、今日はコーンの収穫。一人ひとりが1メートル四方の畑を持ち、自分で苗を選んで育てています。

2015年の春に引つ越しました。こ

こは元々おばあちゃんが一人暮らしを

していた古民家です。障子はボロボ

ロ、雨漏りもして、どこもかしこも埃

だらけでした。自分たちで何度も通っ

て改装しました。

——辺見さんが保育をする上で大切

にしていることを教えてください。

辺見 原発事故が起きてから特に、自

分で考えて発言・行動ができる力が必

要だと感じています。そのためには私

たちがやっている自然体験が重要な

ではないかと思うのです。自分の五感

で、何が危険で何が大丈夫かを判断し

たり、不測の事態に対応できるように

柔軟に考える力をつけてもらいたい

と思っています。

私が保育で一番大切にしているのは

自尊感情です。自分は大切な存在だ。

いい子であっても悪い子であっても、

ここにいていい存在だ。その気持ち

があれば、どんなに悲しいことがあつて

も、自分を大事に思える。青少年の自

死が多い日本の教育に欠如している部

分だと思つています。それには小さな

頃からの積み重ねが必要です。やりた

いことがあつても、大人にダメ、危な

いと止められては、やりたいことがわ

からなくなつてしまいます。たけの子

のモットーはAKB（あぶない・きた

ない・ばかばかしい）。くだらないこと

でもいいから、子どもたちが自分で選

択して実行することができると環境であ

りたいと思つています。

辺見さんと園児のやりとりを見なが

ら、自尊感情というのは日常の小さな

やりとりから育まれるように感じまし

た。子どもがブランコにも乗れない世

の中にはほしくない。子どもたちが外

で寝転び、季節の草花や生き物に触れ

る環境が当たり前であり続けるよう

に、私たち大人も想像力と創造力を磨

いていく必要があると感じました。